

# 『戦後文学は生きている』

海老坂 武著、2012年、講談社現  
代新書 800円＋税

高橋 武智

集英社から刊行中の『コレクション(戦争×文学)』は「日本戦争文学全集」といって  
もいいほど内容が豊富だ。これに対し、本書  
はわずか20の作品をとりあげただけだが、た  
とえば鶴見俊輔『転向研究』、小田実『何で  
も見てやろう』、永山則夫『無知の涙』のよ  
うな通常「文学」とは見なされないものが含  
まれている。

フランス文学史には、独自の文体をもち、  
時代に大きな影響を与えた歴史書や哲学書も  
登場するが、そういうカテゴリーの問題とい  
うより、一般に文字で書かれた著作、もっと  
広く読書人の対象としての書物を指して、こ  
こでは「文学」と呼んだと理解すればよいの

## 戦後文学は生きている

海老坂 武

### 名作が語る 日本の現代史

珠玉の作品ガイド20

『うけわたつみのこえ』『夏の花』  
『夏の花』『野火』『解ける鎖』  
『墮落論』『他者の存在』  
『五勺の酒』『孤獨の孤獨』  
『転向研究』『日本の思想』  
『わが解体』『海辺の光景』  
『何でも見てやろう』『砂の女』  
『万延元年のフットボール』  
『道かな』『カクテル・パーティー』  
『全アケル・パーティー』『無知の涙』

講談社現代新書

だろう。

戦争中の軍国少年、戦後いち早く反戦少  
年となり、フランス文学・思想の研究者となっ  
た海老坂は、初読で強い印象を受けたのち、  
繰り返し読み、そのたびに読みが深くなって  
いった作品について、時々の感想を自己分析  
しながら、若い読者向けに簡明率直な言葉で  
語りかける。

サルトリアンらしく、発表されたとき、あ  
るいは読み直したときの「状況」のなかにそ  
の書物を位置づけているので、全体として著  
者が体験したままの一つの現代史像が浮かび  
あがってくる思いがする。

戦後に刊行されたもののうち、1972年  
に発表された作品までを扱い、「戦後」の節  
目としている。それぞれ現在入手可能な版を  
示しているのは読者に親切だ。

全体を5章に分ち、戦争をめぐる章で  
は、『きけわだつみのこえ』、原民喜『夏の花』、  
大岡昇平『野火』などが、戦後のカオス期で  
は、坂口安吾『墮落論』、中野重治『五勺の酒』、  
堀田善衛『広場の孤獨』などが、転向や主体  
の問題をめぐるのは、前記『転向研究』、丸  
山真男『日本の思想』、高橋和巳『わが解体』が、  
『世界を異化する』章では、前記『何でも見  
てやろう』、安部公房『砂の女』、大江健三郎  
『万延元年のフットボール』などが、『辺境か  
ら』の章では、深沢七郎『榎山節考』、前記『無  
知の涙』などが対象となっている。なお、著

者自身が認めているとおり、女性作家の書物  
は一冊も含まれていないことも特記したい。

できれば触れたかった作家として、野間  
宏、武田泰淳、埴谷雄高、加藤周一、竹内芳  
郎、花田清輝、吉本隆明、谷川雁の名をあげ  
ているが、これ以外にもそうそうたる戦後  
文学の旗手がいたことを思い出す。小田の  
『HIROSHIMA』は言及されてはいるが、も  
う少しつっこんでほしかったなど、作品の選  
択への注文はつきない。

ほんとうは一冊をとりあげ詳しく紹介した  
ところだが、残念ながら紙幅がない。今の  
時点で見ると、存命の作家は大江健三郎、大  
城立裕(『カクテル・パーティー』)、鶴見俊輔、  
安岡章太郎(『海辺の光景』)の4名だけとなり、  
「戦後は遠くなりにはけり」の感慨をいだかさ  
るをえない。

気安く読める本なので、ご一読ののち、読  
者の皆さんが、思い思いに20冊の戦後文学作  
品を選び、それと関連づけてご自身の現代史  
を検証されてみてはいかがだろうか。

(たかはし・たけとも/本誌編集委員)



カット 村雲 司